

韓国教会にみるキリスト教と伝統文化⁽¹⁾

秀 村 研 二

1. はじめに

韓国社会を人類学的立場から研究したパイオニアである秋葉隆は、韓国の宗教文化を分析するにさいして儒教と巫俗の「二重構造モデル」を提示したのであるが、このモデルは長く韓国社会を研究する研究者たちによって使われてきた。⁽²⁾ さて韓国社会は経済的に急速な成長をとげておりまた様々な社会文化的な変化が起こっているが、その一つにキリスト教信者の急激な増加がある。外来の大伝統であるキリスト教が韓国社会にどのように受容されており、どのように信仰されているのかをみて、また現代の韓国社会においてキリスト教が「二重構造モデル」とどう関連しているのかを明らかにすることを本稿の目的とする。そのために韓国のキリスト教に関して概観したのちに、ある教会の事例について具体的な記述を必要なかぎりおこない、考察を試みることにする。

韓国のキリスト教は、1784年の李承薫の北京におけるカトリックの洗礼に始まりカトリシズムは200年の歴史を、プロテスタンティズムは1882年の4人の韓国人による満州での洗礼に始まる100年の歴史を有している。⁽³⁾

なお本稿は韓国のキリスト教のうち、信者数の多いプロテスタンティズム（韓国では改新教という）を対象としておこなった調査にもとづいており、カトリック教会についてはほとんど言及しない。

〈韓国キリスト教略史〉

プロテスタント教会は欧米の宣教師たちの伝道などにより信者数を増

やしていったが、特に1907年のリバイバル運動である大復興会運動を契機として信者数は急激に増え、日本の植民地下(1910～1945年)にかけて弾圧にもかかわらず信者数は伸びた。日本の敗戦による解放後、朝鮮戦争の混乱やクリスチ안의多かった北からの避難民などもあり信者数は増えていったが、特に1960年代から急激に増加した(図1)。1984年の統計によるとプロテスタントがおよそ760万人、カトリックが170万人である。⁽⁴⁾

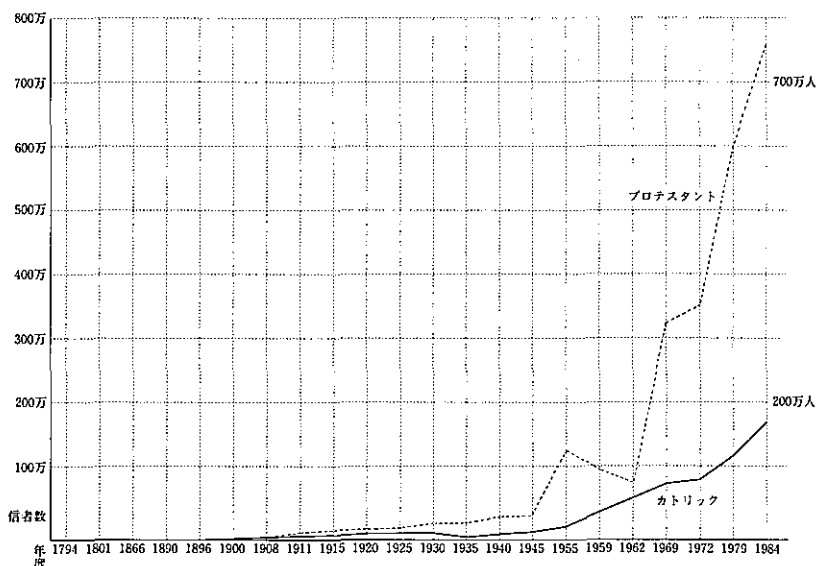


図1 韓国キリスト教の信者数の増加 (1794～1984年)

『韓国キリスト教成長100年』基督教文社、ソウル、1986年による

このように韓国社会におけるキリスト教信者の増加は急であったのだが、韓国キリスト教の特質として柳東植は次のようにまとめている。まず社会変動と関わる外部的な要因として、1) 日本の植民地下で反日運動と結び付いたこと、2) 日本の植民地からの解放はキリスト教の解放であったこと、3) 朝鮮戦争による社会の流動化と不安、4) 60～70年代の経済成長と社会不安、それに独裁的な政治体制下での民主化運動をあげ、

韓国特有の宣教活動と信仰形態として、1) 祈禱会、2) 聖書研究会、3) 神秘主義的な復興会、4) 近代的な文化の担い手としての教育や医療活動などをあげている。また民族的な靈性、神観念としての「ハヌニム hanunim」がキリスト教の神を受け入れやすかったとし、植民地下や独裁下においてその社会的な関心や闘争性が特質となったとしている。⁽⁵⁾

〈人類学的研究〉

現代韓国社会にあってキリスト教は大きな位置を占めているにもかかわらず、キリスト教に関する研究は主に教会史や宣教のためのキリスト教の土着化論争として研究されてきており、社会科学特に人類学からのアプローチは多いとは言えない。その中からいくつかをあげてみると以下のようなものがある。

まず崔吉城は、外来の革新的な文化としてもたらされたキリスト教は、巫俗（韓国土着のシャーマニスティックな民俗文化）へ適応しつつ宣教と土着化がはかられたとして、その代表的な例として復興会をあげている。そしてキリスト教における聖霊の臨在と巫俗での降神に類似点があり、それが教会の成長に大きな役割を果たしたという。また儒教と巫俗が相互補完を維持しているように、キリスト教も儒教の非宗教的部分を補完して機能していると述べている。⁽⁶⁾

伊藤亜人は、儒教的なものに価値付けられたものを規範とする階層に対し、近代化の中で新しく興隆してきた階層の非儒教的で現世主義的なものに意味を付与する体系の一つがキリスト教ではないかと推測している。⁽⁷⁾

また坂本一光は、「女性が主体となってきた巫俗・民間信仰と李朝以来、男性が担当してきた儒式祭祀との両宗教基盤を、柔軟に継承することによって、キリスト教は今日の教勢を獲得した」と述べ、キリスト教の礼拝や教職者の個別訪問などの宗教活動は、女性たちの巫俗・民間信仰的要求に答えており、また追悼礼拝の設定は儒教の祖先祭祀との衝突を避けているとして秋葉がモデルとした巫俗・儒教の両者をキリスト

教が機能的に継承していると述べている。⁽⁹⁾

II. 教会と信者

本稿で事例として取り上げるのは、ソウル市内に位置する延禧教会 (yŏnhui-kyohoe) である。延禧教会は韓国でも一番数の多い長老派に属する教会であり、保守的であるといわれる長老派の教会を調査することによって韓国教会の特徴がみえてくるのではないかと思われたからである。⁽⁹⁾

延禧教会はソウル市西大門区延禧洞 (yŏnhui-dong) に位置するが延禧洞は1960年代後半より都市化が進んだ地域で、⁽¹⁰⁾ 現在では住宅地と商業地となっている。経済的には比較的に豊かな人々が多いが、丘の上の市営アパートに住む比較的に所得の少ない層や、一部屋を借りて家族で住む人々もおり教会の信者にも経済的な格差がある。

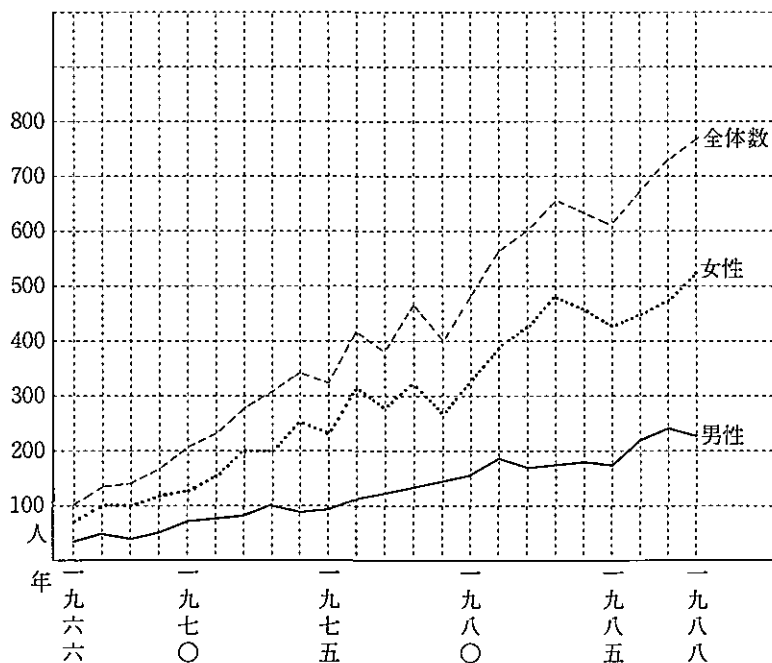
〈教会の歴史〉

延禧教会の歴史は表1のごとくであるが、1946年に仁川から延禧洞の農家に嫁にきた熱心なクリスチャンであった婦人が始めた家庭集会に始まる。現在までの信者数の増加は図2に示すとおりである。

表1

| | |
|------|------------------|
| 1946 | 延禧洞310にて家庭集会始まる |
| 1948 | 延禧洞399に礼拝堂を建てる |
| 1953 | A牧師赴任 |
| 1956 | 延禧洞301に礼拝堂を建築 |
| 1957 | B牧師赴任 |
| 1959 | C牧師赴任 |
| 1961 | D牧師赴任 |
| 1964 | E牧師赴任 |
| 1966 | F牧師赴任 |
| 1969 | 新礼拝堂建設 |
| 1971 | 600名収容の新礼拝堂完成 |
| 1972 | 女伝道会が開拓伝道 |
| 1973 | 男伝道会が開拓伝道, 牧師館購入 |

- 1975 教育館建設
- 1977 幼稚園開設
- 1978 G講道師が副牧師となる
- 1979 H副牧師赴任
- 1981 I 副牧師赴任
- 1982 土地を購入し教会管理人の家と教会前庭の整備
- 1983 J 副牧師赴任
- 1984 牧師館を移転
- 1985 F牧師辞任, K牧師赴任
- 1986 L副牧師赴任
- 1987 M副牧師赴任 (副牧師が2人となる)



※ 毎年4月第一週の日曜礼拝の出席者数により作成したものである。

図2 延禧教会信者数の変化 1966年から1988年

この間に信者数の増加と共に教会堂も2度建てかえられ、1971年に現在の教会堂が建てられているがその後も敷地を広くしたり増築や設備の更新などが続いている。牧師は現在の牧師で7人目であるが、1966年から1985年まで19年間にわたって担当したF牧師のもとで教会は成長していった。この時期が延禧洞が住宅地として人口が急増していく時期にもあたっていたのである。信者数が百名程度のときに現在の教会堂（増築はされたが）を建築したことは延禧洞の発展をみこしてのことであったという。このF牧師が延禧教会を去ることになったのは、教会の運営をめぐる長老たちと、F牧師と彼を支持する有力な信者たちの間に対立があったためである。結局牧師側が敗れ支持者たちと教会を出て近くに新しい教会を創ったために1985年には信者数が減少した。しかしこの後に赴任したG牧師の評判が良く信者数はまた伸びつつある。またこのような教会の分裂は韓国のプロテスタント教会においては決して珍しいことではないことを付け加えておく。

現在の教会の施設としては3階建ての教会堂の2階に600名収容の大礼拝堂がある他に、教会学校や諸集會に使用される100名程が入る礼拝室が合わせて5つあり、食堂や事務室などもある。また幼稚園が併設されており、また管理人や伝道師の住宅が横にあり全体の敷地としては、千坪程である。また牧師たちの住宅は他に教会で用意している。教会の牧師や職員としては、牧師が1人、副牧師が2人、女性の専任の伝道師が2人、主に教会学校を受け持つパートタイムの牧師が1人と同じくパートタイムの伝道師が3人がおり、また事務職員としては男性2人と女性1人がおり、管理人は一家で住み込んでいる。ソウル市内にある教会としてはさほど大きな規模ではない。⁽⁴⁾

〈教会の行事・組織〉

延禧教会で行われる礼拝や集會としては次のようなものがある。日曜日の午前には7時と9時と11時の3回の礼拝があり、午後7時に夕礼拝（讃揚礼拝）がある。水曜日の午後7時から水曜祈禱會が、金曜日の午後

10時から12時まで徹夜祈禱会がおこなわれるほか、毎朝5時から1時間ほどの早朝祈禱会がおこなわれている。他に聖書の勉強会や、後述の区域のための区域長を対象とした勉強会も行われている。また夏には修養会がおこなわれたり、春には復興会が数日間おこなわれる。

延禧教会においては信者が教会に登録すると、世帯を単位とした教籍カードに記入される。そして10世帯程を単位とした区域（kuyŏk）がつくられているのだが、新しい信者は住んでいる所のその区域に入れられる。区域には区域長が1人、勸察という補佐役が2人置かれており、信者は区域長をととして教会に把握されている。区域では金曜日の午前中に、区域長を中心として信者の家を毎回順番に廻りながら区域礼拝がおこなわれる。

信者の側の役職者としては、男性の長老（changno）が11名、同じく男性の按手執事（ansuchipsa）が9名である。この20人が教会の運営の中心的な存在である。さらに女性の年長者の役職者である勸師（kwŏnsa）が15名、男性の執事が70名、女性の執事が207名である。長老は牧師と共に教会の運営を決定する「堂会（tanghoe）」を構成する。按手執事は選挙によって選ばれる長老の候補たちでもあり、さまざまな委員を務めている。延禧教会が所属する韓国の長老教会の教派では女性は教会の運営に関与することができないが、勸師というのは「教会の母」としての役割が期待されており、日常的な活動の中心となっていて、女性の長老といった感じである。役職の内、洗礼を受けた信者の投票によって選ばれるのが、長老・按手執事・勸師であり、一般の執事は牧師・伝道師・区域長などの推薦で堂会によって任命されている。

信者の組織としては、一番活動的なものが現在三つある聖歌隊（sŏngadae）である。年齢と男女の別がない組織であり、年齢や男女の別を強調するとされる伝統的な韓国社会からみれば新しいものということができるであろう。聖歌隊は50名程からなり、日曜日の午前中の礼拝と夕方の礼拝の時に賛美歌などを歌い、そのための練習も日曜日のほかに

週に2回おこなっている。教会学校の教師たちも各教会学校ごとに組織されている。教師になるためには本人の希望と他の人からの推薦であるが、それとなく牧師や有力なメンバーから依頼されることが多いという。年齢別の組織としては、40歳以上は10歳ごとに男女別に伝道会があるが、積極的に参加し活動するメンバーは限定されている。結婚してから40歳までは、夫婦単位で参加する集会があり、現在のG牧師になってから積極的に活動しようとしているが参加人数は少い。結婚前の男女は、高等学校以上が青年部となっているが、この年代は礼拝への参加者は多くいるものの、青年部の活動をおこなうものは少い。

〈信者〉

信者たちの性別年齢別の構成を示したものが図3である。図からみてわかるように女性のほうが多く、全体の3分の2近くが女性である。世帯ごとにまとめられた信者の居住地を示したのが表2である。圧倒的に延禧洞の中に住んでいる人が多いことがわかる。西大門区内に住む人々も延禧洞に隣接する場所の人が多い。またソウル市内の他の区の場合でも比較的に近い場所の人が多いが、延禧洞から引っ越した後も他の教会に移らずに延禧教会に來ている人も少なくない。またソウル市外に住む人の場合は、日曜の礼拝だけに来る人がほとんどである。また延禧教会に所属するようになって何年たったのかを表したのが表3である。5年未満の世帯が50%に近いことから最近の教会の信者数の増加とも符合するし、移動性の高い韓国社会を反映しているということもできよう。ただ延禧教会に長く所属している世帯ほど世帯全員が教会の信者である場合が多い。次ぎに世帯から延禧教会にどのような人々が所属しているのかを示したのが表4である。家族全員が所属している形が4分の1近くあるが、女性一人や母親と子供といった形が多いのがみてとれる。これらのことから女性が多いことと、家族の中で夫がクリスチャンでない場合が多いことがわかる。このことは後述の儒教祭祀の問題とも関連する。

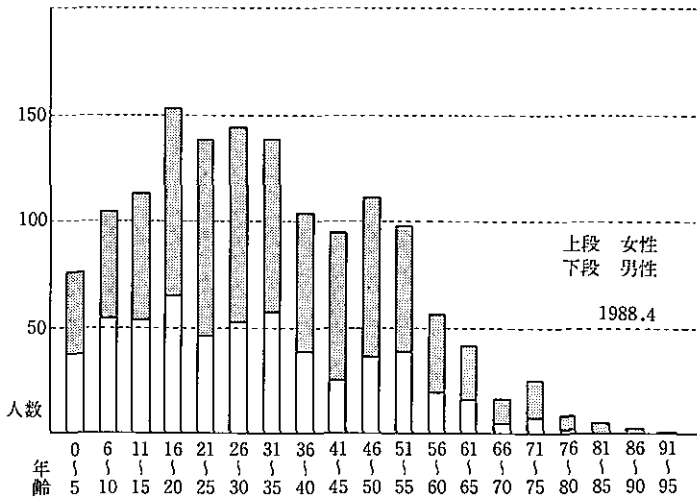


図3 男女の構成

表2 居住地別世帯数

| | |
|---------|-----|
| 延 禧 洞 | 392 |
| 西 大 門 区 | 49 |
| ソウル市内 | 106 |
| ソウル市外 | 18 |

表3 所属年数別世帯数

| 年 数 | 世帯数 | % |
|-----------|-------|-------|
| 5 年 未 満 | 1 年未満 | 66 |
| | 1 年 | 72 |
| | 2 年 | 62 |
| | 3 年 | 43 |
| | 4 年 | 22 |
| 5 ～ 9 年 | 142 | 25 |
| 10 ～ 14 年 | 88 | 15.6 |
| 15 ～ 19 年 | 52 | 9.2 |
| 20 年 以 上 | 18 | 3.2 |
| 合 計 | 565 | 100.0 |

表4 所属形態別世帯数

| 形 態 | 世帯数 | % |
|--------------------|-----|-------|
| 家 族 全 員 | 131 | 23.2 |
| 夫 婦 の み | 64 | 11.3 |
| 夫 婦 と 子 供 | 48 | 8.5 |
| 父 親 と 子 供 | 4 | 0.7 |
| 母 親 と 子 供 | 111 | 19.6 |
| 祖 父 母 と 子 供 | 11 | 1.9 |
| 子 供 た ち | 17 | 3 |
| 家族の中 から一人 のみ | 男性 | 15 |
| | 女性 | 119 |
| 単 身 居 住 者 | 43 | 7.6 |
| 不 明 | 2 | 0.4 |
| 合 計 | 565 | 100.0 |

〈日常活動〉

次ぎにごく平均的な延禧教会の日常活動をスケッチしてみることにする。教会の朝は早い。韓国の教会に独特なものだといわれている早朝祈禱会 (syaebhyök-kidohoe) が朝の5時から始まる。以前はそれを知らせるための鐘を鳴らしていたが、付近に住む住民からの苦情があり現在では鳴らさなくなっている。早朝祈禱会に参加する人は延禧教会の場合30人程であるが、だいたい毎朝同じ顔ぶれである。それも長老たちや老婦人たちが多い。30分ほどの礼拝がおこなわれるが、牧師3人が1週間ごとに交替で説教を担当している。牧師と専任の伝道師2人は毎日参加しなければならない。礼拝の後に各自の祈りの時間があり、声を出して祈っている人もいるがさほど大きな声ではない。早朝祈禱会に使用されるのは教会堂1階の礼拝堂である（教会学校の初等部に使用されていて初等部室と呼ばれさまざまな集まりに一番使用されている。その理由は現在の教会堂を建てたときに一番先にできて長く礼拝堂として使われていたからかも知れない）。6時くらいに牧師たちは一度家に帰った後、9時に教会に出勤してくる。まず事務職員と牧師、伝道師が集まりその日の予定を確認してから、1日の活動が始まる。韓国の教会では信者の家を牧師または伝道師が訪れて礼拝をしたり相談にのったりすることを尋訪 (sinbang) といい、毎日何軒かの尋訪をおこなっている。尋訪がある時には、副牧師と伝道師が2人で1組になって行くが、葬式や特に頼まれた時には牧師が行く（尋訪については後述する）。尋訪に行かない時間には牧師たちは説教の準備や読書をするが、伝道師の2人は区域長や勧師たちや有力な女性の信者（多くは執事ということになる）に電話をかけて信者たちの様子を尋ねるとともに、問題を抱えている信者がいるとわかるとその人に電話をかけ、必要であれば尋訪をおこなうようにする。病気で入院した人などがいると必ず病院まで尋訪に出かけて行く。また新しい信者の登録なども伝道師によってなされる。さらに毎日のように集会（聖書勉強会・新信者の会・老人会・区域長のための勉強

会など)があり、その指導も牧師や伝道師たちがおこなう。水曜日の祈禱会や、金曜日の徹夜祈禱会にも牧師・伝道師は全員出席するが、他の日は5時で退勤する。月曜日は牧師と伝道師は休日となるが、事務員は交代で出勤してきている。

III. 延禧教会にみられる韓国キリスト教の特色

前節において延禧教会を概観したので本節ではいくつかの点にしぼって、韓国のキリスト教の特色と思われるものについて延禧教会における観察をもととして述べてみる。

〈祈禱〉

韓国のキリスト教会の祈禱を特徴づけるものとして「通声祈禱 (t'ongsŏn-kido)」があげられるであろう。「通声祈禱」は皆が声を出して思い思いに祈ることを指すのであるが、このこと自体は韓国のキリスト教に限られたものではない。ただ非常に特徴的である。延禧教会は教理的に保守的な教会といわれる長老派に属していて、信者たちの教育程度や経済程度も比較的に高いにもかかわらず、この「通声祈禱」がよくなされている。毎朝の早朝祈禱会では、牧師の短い説教の後に各自で個人的な祈りについて祈るのであるが、このときには低い声でつぶやきながら祈られる。体を前後左右に揺すりながら祈る人もいる。なお体を揺らすことに関しては、祈禱のときだけでなく讃美歌を歌うときにも体を揺らす人が多いことにも注目しておきたい。

これに対して金曜日の夜の金曜(徹夜)祈禱会では、前半は説教であるが後半の約1時間は説教者が共通の「祈禱題目」を与えてそれについて各自が祈るのである。これは例えば病人の快復を願ったり、説教の内容に従ってそれにふさわしくなれるようにというようなものである。このときには、大きな声で体を揺すりながら祈られる。またあいだに、「abŏji (お父さん)」、「chu-yŏ (主よ)」、「kamsamnida (ありがとうございます)」などという言葉がはさまれることが多い。夜でもあり騒がし

いので近所の住民から苦情が出るほどである。

区域礼拝の時に「通声祈禱」がなされることがある。問題を抱える人が皆で祈って欲しいと頼むのである。問題は家族の健康、子供の進学などについてである。延禧教会では日曜日の礼拝において、「通声祈禱」がなされることがあったがまれであった。筆者のみた限りでは、8月15日の光復節（独立記念日）や国会議員の選挙などのときであった。教会によっては礼拝毎にするとところも少なくないのだが、そういう教会は延禧教会の信者にいわせると「熱い」のであり、自分たちは「冷静」なのだという。しかし「冷静」なことに不満を持っていて、もっと「熱い祈禱」を望んでいる人々も少なくない。

また春に4日間ほどおこなわれる復興会（puhung-hoe）では、復興師（puhungsa）と呼ばれる説教者が会衆たちを泣かせたり笑わせたり、拍手を打たせたりしながら前述の「通声祈禱」が何回もおこなわれ、信者たちを高揚させる。

早朝祈禱会には前述のように顔ぶれはあまり変わらないのであるが、時に祈禱する問題を抱えた人が来ることがある。現在35歳のA（男）はカーテンの店を延禧洞で開いている。数年前に資金繰りに苦しみそれまであまり熱心に通ってもいなかった教会であったが、40日間という期間を決めて早朝祈禱会に「所願祈禱」をしたところうまくいったのでそれから教会に積極的に関わるようになったという。

一男一女を持つB（52歳、女）は、2年前に長男の大学入試のために早朝祈禱会に通ったという。健康や経済問題、家族の問題、夫との葛藤、子供の教育問題などで問題が解決するまで通う人もいるし、解決してもそのまま通い続ける人もいる。

〈区域と女性〉

前述のように信者は世帯ごとに区域のメンバーとして登録され区域礼拝に出席するのであるが、区域礼拝が金曜日の午前中におこなわれるため、出席する人は大部分が女性である。女性でも仕事を持っている人は

出席できないが、それでも半数ほどの世帯から出席がある。区域長もほとんどが女性であり区域は女性の組織として扱ってもよい。特に新しく教会の信者となった人に対して、区域を同じくする女たちの存在は大きい。結婚をして新居を延禧洞に構えた若い婦人には、夫が出勤してしまえば知っている人もおらず、地方出身であればソウル市の地理もよくわからないのだが、教会の区域で年齢が近い婦人がいると家も近いためか急速に親しくなり、またその関係も長く続くようである。

現在30歳で7年前に結婚して夫と2人の子供のいるある女性は、1985年に延禧洞に引っ越してきた。夫がクリスチャンであったので教会に以前から通っており延禧洞に引っ越してきてからすぐに延禧教会に登録をした。親しい人はなかなかできなかったが1987年に区域の線引きが変わり（毎年人数が増えているので区域の線引きが変わる）、同じ年代（20代後半から30代前半）の女性が4人同じ区域になったので親しくなり、今では毎日集まっては話したり相談しあったり、キムチやおかずなども分けあったりしている。年齢が近いこと、子供が同じくらいの年であること、みな教会の信者であるので非信者の友人（例えば学校の同窓生）などと話すよりは気軽であるという。姉妹のような関係であり、その家のことならなんでも知っているという。年上の人には「オンニ（お姉さん）」と呼びかける親しい関係である。

また1962年にまだ農村であった延禧洞に農家の嫁として嫁いできた50歳になる婦人は3人の親しい教会の友人がいるが、そのうち2人は若い頃区域を一緒にして親しくなったといい、他の1人は数年前にその2人の友人たちが同じ区域で親しくなった人であり、友人たちをとおして親しくなったという。この人の場合もそれらの友人は用もないのに集まっては話しをしているような関係だという。

人口の急増による急激な都市化、頻繁な移動などによって流入してきた女性たちは生活の場での新しい関係を作っていかなければならないのだが、それに対して教会の区域は新しい関係を与えやすいものとして機能

しているように思われる。

〈尋訪 (sinbang)〉

尋訪については前述のとおりであるが、ここではその内容についてみることにする。表5は1988年3月から5月の3カ月間に延禧教会でおこなわれた尋訪をその種類によって分けたものである。

大尋訪 (taesinbang) は春と秋に定期的におこなわれるもので、延禧教会では1週間に3個から4個の区域をまわり3カ月ほどをかけて全区域をまわるものである。牧師、伝道師、長老、区域長の4人が一組となって対象となる区域のほとんど全世帯をまわる。未婚の単身者以外は主婦が仕事を持っていてもできるだけ家にいて牧師たちを迎える。1軒にかかる時間は20分から30分ほどで、短い祈禱と賛美歌の後、牧師がそ

表5 尋訪(シンバン)の種類別回数

1988.3~1988.5

| 種 類 | 回 数 |
|-----------|-----|
| 大 尋 訪 | 292 |
| 病 気 見 舞 い | 30 |
| 結 婚 | 5 |
| 葬 式 | 5 |
| 慰 労 | 6 |
| 引 越 し | 21 |
| 出 産 | 5 |
| 新 信 者 訪 問 | 25 |
| 区 域 礼 拝 | 3 |
| 追 悼 礼 拝 | 3 |
| ペ ギ ル | 2 |
| 開 業 記 念 | 4 |
| そ の 他 | 34 |
| 計 | 435 |

教会日誌より作成

の家でその時に問題があることや困っていることなどをきいて、もしあ
るとそれにあった聖書の箇所を選び短い説教をおこなう。そして最後に
それについて祈禱をおこなう。何軒も廻るので昼食は接待を受けること
になるのだが、それをする人は名誉なことだと思われている。

大尋訪以外で多いのは病氣見舞い、引越し、新信者に対する尋訪であ
る。病氣見舞いは前述のように誰かが入院したときとだいたいすぐ
におこなわれる。病院では個室でない場合、祈禱を中心としているとい
う。引越しは近くに引越しをする人が多いためほとんどが延禧洞の中で
である。葬式や結婚式は本人が延禧教会の信者でなくとも、親とか子供
とかが信者であるときに行き、その信者のために祈ってくる。開業記念
は牧師、伝道師そして長老などの教会の有力メンバーを招いておこな
われることが多い。食事などの接待もなされる。ペギル (paegil) は子供の
生後百日のお祝いのことである。追悼礼拝については後述するがその数
が全体の尋訪の数からすると（大尋訪を除いたとしても）少ないこと
には注意を要する。⁽¹²⁾

尋訪については、教会側からするならば信者の状態を把握し、抱える
問題などに対して信仰的な力を与えようとしたりする信者確保のための
ものであるのに対し、信者の側からは牧師が持つ何らかの力に期待が寄
せられ、特に牧師の祈禱によって「福」がもたらされると考えられてい
ることが多いようであり、意識にギャップがみられる。

〈儒教祭祀と追悼礼拝 (chudo-yedae)〉

儒教の祖先祭祀ではその人の忌日に4代まで遡って祖先祭祀 (che-
sa) がおこなわれる。韓国ではキリスト教が伝来したときにもこの儒教
の祭祀をめぐる迫害がおこなわれたし、現在でも男性がクリスチャン
でない場合にはこの儒教の祭祀をめぐる対立がみられる。それはキ
リスト教とくにプロテスタント教会が儒教祭祀を偶像崇拜として認めて
いないことによる（カトリック教会では積極的に祖先祭祀を取り入れて
いる）。⁽¹³⁾ 儒教的な伝統の強い韓国社会において祖先祭祀を全く否定し

てしまうことはできず、西欧のキリスト教でも故人を記念することもあり、死者の忌日に儒教祭祀のかわりに追悼礼拝がおこなわれる。この追悼礼拝をおこなわなければならないとされるのは、儒教の祭祀と同様に長男である場合が多い。したがって長男でない場合には、おこなうかどうかよりは、どう参加するかという問題となる。追悼礼拝は故人夫婦の写真を並べて飾り、それを前にして賛美歌を歌い牧師が聖書を読み短い説教をおこない祈禱をする。そして食事を共にするのであるが夫婦の写真と一緒に飾られることや（夫婦が共に死亡している場合）食事を一緒にすることに、儒教の祭祀において夫婦の神位（位牌）を並べることや祭祀の後に供物を共にすること（飲福）から色濃く影響されているといえることができるであろう。¹⁴⁾

延禧教会の長老で小さな建築業を営むT氏（58歳、男）の場合、父母の祭祀は次のようである。T氏は全羅道の出身で、中学校を卒業してから信者となった。長男であった父親はT氏の結婚前に亡くなった。T氏がクリスチャンであったことから、T氏の祖父母の祭祀は故郷にいる叔父（父の弟）に委ねられた。結婚してから父親の忌日には家族で集まって追悼礼拝をしていたが8年ほど前から止めた。父親が亡くなって時間が随分とたったためだという。祖父母の忌祭祀の日には叔父の家まで行ったが絶対に拝礼をしなかったので叔父といつも口論となった。今では叔父も亡くなり従兄弟の代となったので拝礼をしないことを分かっているという。母は5年前に亡くなったが、1年目の忌日には牧師や伝道師、長老たちを呼んで追悼礼拝を行い、故人の好きなものを作ったりして食事を一緒に食べたが、2年目からは家族だけが集まって礼拝をしている。

追悼礼拝に関して延禧教会では教会側からは積極的な働きかけもせずまた否定もしていない。ただ信者からの依頼があれば牧師もおこなうといった程度である。そのためか牧師にきてもらう追悼礼拝は多くの場合、1回か2回で止めてしまいその後は家族だけで集まっているようで

ある。ただ例外的には自分の両親の追悼礼拝を10年以上牧師に依頼している人もいないわけではない。

U氏（42歳、女性）は熱心な信者で1男1女の母である。仁川の出身で1970年に市営アパートができて延禧洞にきたのだが、信者になったのは1976年にアパートの同じ棟にいた人の家に教会の牧師や信者がよく来るのをみて教会にかよいたくなって信者となったという。夫も数年たって教会にいくようになり、洗礼も受けたが、さほど熱心ではない。夫は長男ではないのでソウル市内にいる兄の家でおこなわれる夫の父親と母親の祭祀がある日には家族全員で行かねばならない。祭祀への参加は夫はしかたがないが、長男には拝礼をせずにただ座っているようにと教えているので、夫の兄や兄嫁から非難されている。

また自分と子供3人だけが信者である36歳の女性は、夫の父の家でおこなわれる年に8回の祭祀の日には午前中から行って準備だけはするが準備が終わると1人で帰ってくるという。男の子が1人いるが祭祀にはまだ連れていっていない。夫の父親からはキリスト教の悪口をいわれているのだという。

女性自身は儒教祭祀に準備では参加をし拝礼などに参加はしなくてもよいのであるが、男の場合は子供でもある程度の年になると参加を強制されるので、母親として他の親族と対立することとなるのである。

IV. キリスト教と伝統文化

前節において韓国のキリスト教において特徴的と思われる事柄の中から祈禱・区域・尋訪・追悼礼拝について延禧教会の例から概観してみた。前述したように延禧教会は韓国の数多くのキリスト教会の中では、キリスト教の信仰の面からいうならば保守的であると牧師や信者たちによって思われている教会である。そのような教会で韓国の伝統文化とキリスト教がどのように関連しているのかみてみたい。まず以上述べてきたことを簡単にまとめてみることにする。

祈禱が特に「通声祈禱」としてさまざまな場面でなされている。金曜日の徹夜祈禱会や早朝祈禱会などでそれが端的に現される。尋訪という形での牧師（聖職者）が家庭を訪れ問題について祈るが、それを迎えるのは女性たちである。女性たちは区域をとおして教会につながり、また区域のメンバーどうして親しくなっている場合が多い。礼拝への参加も女性が積極的である。また礼拝のときには夫婦で出席する人々以外は男女が分かれて座ることが多い。⁽¹⁸⁾ 教会の運営に関しては男性中心である。信者の家では父母（多くは）の儒教的な祭祀の代わりに追悼礼拝をおこなうが、追悼礼拝という形でなされるのは短く後は家族のみの集まりとなる。女性のみが信者である場合は儒教祭祀への子供の参加をめぐって夫や夫の親との対立がみられる。1年任期の（ただしほとんどが毎年任命される）執事が多くいて、教会の中または信者どうしでは「chipsanim（執事様）」と呼び、名称へのこだわりがみられる。

以上の述べてきたことから韓国におけるキリスト教と伝統文化との関係について述べてみる。まず祈禱の問題である。韓国のキリスト教会では「恩恵（unhae）」が強調され、祈禱がさまざまな場面でなされる。それが一番よく表現されているのが祈禱院（kidowon）であると思われる。延禧教会でも1カ月に1回金曜の徹夜祈禱会として、他の教会の所有となる祈禱院を借りて本当に徹夜で祈禱会をおこなっている。祈禱院とはさまざまな形態があるキリスト教の宗教施設であるが、ほとんどは山や山麓に位置しておりとくにソウル市の近郊に多く存在する。

形態的には、教会が経営するものと個人の経営するものとに分かれ、性格としては、教会の修養会・祈禱会などに使用されるもの、個人の祈禱のために使用されるもの、そして病気治療を目的とするものである。このうちでもっとも人を集めるのは、個人の経営で（職員は多い）病気治療を目的とするものである。このような祈禱院では、毎日のように説教師による集会と個人祈禱とがおこなわれる。個人祈禱は、山の林のなかに作られた祈禱するための個人用の「座席」や、山の斜面に作られた

半量ほどの祈禱用の窟（キドークルkido-kul）などがあり、そこで大きな声で祈禱をしたり聖書を読んだり讃美歌を歌ったりする。泣き叫ぶ人も少なくない。また伝道師など「力を受けた人」によって按手と祈禱による病氣治療がおこなわれるが、特に力のあるとされる伝道師の祈禱院では、信者たち（ほとんどが女性）が讃美歌を歌い祈る中、信者たちのみている前で病氣治療がおこなわれていて、奇跡をおこすとして多くの信者を集めている。これらの祈禱院は教会が所有するもの以外は献金によって経営されており、集まってくる信者には所属する教会は別にある。教会側は信者たちが祈禱院に行くことを積極的に勧めはせず、指導のもとに行って欲しいという。しかし牧師や伝道師も祈禱院に行くことが少なくない。

祈禱院にシャーマニズムの影響をみいだすのは難しくない。特に病氣治療の場面ではそうである。キリスト教の名のもとにおこなわれていることが韓国の現代社会におけるキリスト教の役割を示しているともいえるであろう。また祈禱院でおこなわれる個人祈禱も興味深い。山や窟でおこなわれる祈禱は、韓国の民俗宗教にある聖なる場所としての山と関連があるとも考えられる。たとえばソウル市の北部の山の中腹には、巫堂と仏教寺院とキリスト教の祈禱院などが集まっているところもあるからである。また祈禱のさいにいわれる「sǒngryōng-nim（聖霊様）」が信者たちにとってどのような存在であるのかについても問題としたいが、これについては稿を改めて述べることにする。

さて韓国のキリスト教は今世紀に入ってから社会の急激な変動と共にその信者数を伸ばしてきたわけであるが、伝統的な儒教や巫俗をふくむ民俗宗教との関連はどうであるであろうか。一つには急激な都市化による影響があげられる。村落社会においてはキリスト教は布教はされていても教会はあったとしても信者数はなかなか伸びていない。韓国の村落には数多くの教会はあるが信者は固定されていて規模も小さい場合がほとんどである。韓国のキリスト教（特にプロテスタンティズム）は現在

のところ都市の宗教なのである。人々は都市に出ることによって親族の絆から解き放つことが可能となり、望むなら儒教的な伝統から比較的に自由になれたものと考えられる。儒教の祖先祭祀については坂本一光が指摘しているようにキリスト教の側からは追悼礼拝という形で儒教的な祭祀を汲み上げたとも考えられるが、追悼礼拝がなされる期間が短い点は一考を要すると思われる。ただ儒教の祭祀では宗教的職能者がいるわけではなく祭祀をすべき人間（子孫）によってとりおこなわれるものであるから、家庭礼拝としてなされることのほうが牧師を招く追悼礼拝よりは自然なのかもしれない。ただ儒教とキリスト教がさほど親和的ではないことはあきらかである。

都市化をキリスト教信者の増加の要因の一つと考えたのであるが、祖先祭祀の面ではどうであろうか。都市居住者の祖先祭祀については、朝倉敏夫がおこなったソウル市と光州市のアパート居住者に対しておこなった調査の分析がある。それによるとキリスト教信者は、長男が祭祀を必ずしもおこなう必要はなく兄弟に分けてもよい、娘しかいない場合には祭祀をしなくてもよい、などの回答が他の人々（無宗教、儒教やその他の宗教）に比べて高い。また祖父母の祭祀を直系長孫がしなければならない、祭祀は伝統的な美風良俗である、などに対する否定的な回答が他の人々に比べると高い。ただし「（祖先祭祀に対する）態度においても、伝統的なあり方については改革的な意見が無宗教および他の宗教に比べて強いが、祭祀をすること自体についての意見は大きな差はない」としている。⁽¹⁶⁾

巫俗との関連では、韓国のキリスト教の中に神秘主義的な流れをみいだせるし、シャーマン（巫堂）的な牧師・伝道師によって多くの女性たちの宗教的な欲求をすくいあげている。巫俗的な伝統の中に生きてきた女性にとってキリスト教は表面的にはさほど違和感がなかったのかもしれない。それは繰り返しになるが祈禱院によく現れている。

急激な社会の変動、とくに産業化・都市化のなかで従来の価値基準

や、伝統的な信仰では対処しきれなくなった部分が多くあり、それが巫俗と儒教という「二重構造」の間に隙間として生じてきて、現在ではそれがかなり大きなものとなってきているように思われる。そこにキリスト教がその隙間を巫俗の方に重点を置きながら埋め込む形で入り込んできて多くの信者を獲得しているということができであろう。

注

- (1) 本稿は、第42回日本人類学会・日本民族学会連合大会（1988年11月29.30日、大阪国際交流センター）において「韓国社会におけるキリスト教と伝統」と題して発表したもの、1989年7月に国立民族学博物館共同研究会「韓国伝統文化の形成とそのトランスフォーメーション」（代表：嶋陸典彦）において「一教会にみられる韓国キリスト教の特色」と題して発表したものの一部である。
貴重なコメントを頂いた方々にこの場を借りてお礼を申し上げます。
- (2) 秋葉隆，1954年，pp.137-145。
- (3) 韓国のキリスト教の歴史については教会史の立場から多くのものが出版されているがここでは、関庚培，1982年をあげておく。
- (4) 韓国文化広報部，1984年。
- (5) 柳東植，1987年。
- (6) 崔吉城，1987年。なお復興会については李萬信，1984年，がある。
- (7) 伊藤亜人他，1983年。
- (8) 坂本一光，1984年，p.84。
- (9) 調査は1988年の3月と4月，8月に合わせて2カ月ほどおこなった。またこの調査に関して「韓国社会におけるキリスト教と教会」という題によって，庭野平和財団から昭和63年度研究助成金として援助していただいた。
また調査の経緯については，庭野平和財団「昭和63年度研究・活動報告書」を参照していただきたい。
また調査を快く許していただいた延禧教会のユン・ヒョン Chol 牧師をはじめとした延禧教会の方々に感謝の意を表したい。
- (10) ソウル市の都市化については，金仁 植容友，1988年を参照のこと。
- (11) どの程度の規模の教会を「大きい」というかは難しいが，韓国には単一の教会で30万人を集める純福音教会などのような巨大教会があるし，信者数数千人程度の教会は大都市においてはさほど珍しくないことを述べておく。
- (12) 周寅棹は尋訪の種類として以下のようなものをあげている。
誕生，入居，引越し，開業，臨終，葬式，経済的逼迫，疾病，仕事の失敗，家庭の不和，新信者，信仰問題（周寅棹，1984年）。

- (13) 木鎌節子の韓国江原道横城郡横城邑におけるカトリック教会でのアンケート調査によると、信者の半数が儒教の祖先祭祀をおこなっている（木鎌節子，1988年）。
- (14) 儒教の祖先祭祀については様々な文献があるがここでは朝倉，1989年と R. L. Janelli & D. Y. Janelli, 1982 をあげておく。
- 朝倉「韓国祖先祭祀の変化」は、ソウル市と光州市における祖先祭祀に対する態度についてのアンケート調査を分析したものである。
- (15) 延禧教会では、十数年前までは礼拝堂では左側は男性、右側は女性として座っていたので、今でも男は左側に座るといふ。
- (16) 朝倉「韓国祖先祭祀の変化」1989年，p.783。

参考文献

- 秋葉 隆 『朝鮮民俗誌』六三書院，東京，1954年。
- 朝倉敏夫 「韓国の祖先祭祀と社会組織」『環中国海の民俗と文化 3 祖先祭祀』凱風社，東京，1989年，pp.41-64。
- 「韓国の位牌祭祀」『環中国海の民俗と文化 3 祖先祭祀』凱風社，東京，1989年，pp.121-143。
- 「韓国祖先祭祀の変化」『国立民族学博物館研究報告』13巻 4号，大阪，1989年，pp.741-786。
- 崔 吉城 「무속에서 본 서양문화의 충격과 수용(巫俗からみた西洋文明の衝撃と受容)」성균관대학교 인문과학연구소원 (成均館大学校人文科学研究所編) 『전통문화와 서양문화(II) (伝統文化と西洋文化II)』，成均館大学出版部，ソウル，1987年，pp.221-247。
- 周 寅棹 『現代牧会尋訪 — 理論と実地 —』，牧羊社，ソウル，p.139 (韓国語)。
- 韓国文化広報部 「韓国宗教便覧」文化広報部，ソウル，1984年 (韓国語)。
- 伊藤亜人 井上順孝 デヴィッド・リード 生野善応 「アジアと世俗化」『國學院大学日本文化研究所紀要』51輯，東京，1983年，pp.1-56。
- Janelli, R. L. & Janelli, D. Y., *Ancestor Worship and Korean Society*, Stanford University Press, Stanford, 1982.
- 木鎌節子 「韓国における天主教の土着化」(成城大学卒業論文)，1989年。
- 金仁 權容友編著 「首都圏地域研究」ソウル大学校出版部，ソウル，1988年 (韓国語)。
- 閔 庚培 「韓国基督教会史」大韓基督教出版社，ソウル，1982年 (韓国語)。
- 李 萬信 「教会成長과 復興會」(教会成長と復興會) 大韓基督教出版社，ソウル，1984年 (韓国語)。
- 坂本一光 「韓国キリスト教の土着化における文化的『新解釈』」『九州大学比較教育文化研究施設紀要』第35号，福岡，1984年，pp.73-89。
- 柳 東植 「韓国のキリスト教」東京大学出版会，東京，1987年。

CHRISTIANITY AND TRADITIONAL CULTURE IN KOREAN SOCIETY

《Summary》

Kenji Hidemura

Korean Protestantism has a hundred-year history; the population of the Protestant Christians are about eight million and the rapid increase of the Protestant membership has occurred since the 1960's. This paper focuses on the daily life and activities of the Protestant Church and the Christians in the present Korean Society by pursuing on anthropological research at the Yŏnhui Presbyterian Church in Seoul.

Over the Sixty percents of the Yŏnhui Church members are women and the daily activities of the Church are undertaken by some female members who cooperate with the ministers and female missionaries. But the system and operation of the Church are mainly managed by the male members, especially some presbyters.

Women are organized by units of circuit and each unit holds about ten households as a core of the Church organization. In circuits, new members or young women make good terms with each other.

The conflict between Protestantism and Confucianism becomes apparent with the issue of ancestor worship; and with regard to ancestor worship women are placed in a disadvantageous situation especially when their husband or their father in law are not Christian.

In contrast, Protestantism in some cases are not so antagonistic to Musok, that is, Korean traditional shamanistic belief. For there can

be seen certain similarities between Protestantism and Musok in the content and mode of prayer. For example, the Protestant Christians have prayer meetings every early morning (Shaebŏk-Kidohoe) and every Friday midnight. And each attendant offers vocal prayer in his or her own manner in the prayer meetings.

Particularly, healing rituals have been performed at Kidowon which is special prayer place run by Shamanistic female Christians.

Korean Christianity is filling the vacant space between Confucianism and Musok which has been made by the urbanization and modernization processes in modern Korean society.